

第2回 北九州市後期中等教育に関する検討会議【会議要旨】

1 会議開始日

令和2年5月19日（火）～

2 会議実施方法

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、書面会議とした。

3 次第

(1) 議事

- ① 「魅力ある高校づくり（高校魅力化）」の評価について
- ② 人口動態・産業・周辺の高校の状況等
- ③ 市立高校に関する方向性
- ④ 戸畑高等専修学校に関する方向性

(2) 今後のスケジュール

4 意見

①「魅力ある高校づくり（高校魅力化）」の評価について【資料1】

- ・学校組織文化・風土の醸成・改善を学外にまで拡大していこうとする視点は学びを中核とした北九州のまちづくりに繋がるものであり、市立高校としてのプレゼンスを果たす可能性を感じる。ただ、「学びの土壌が高い」とは予想しづらい鉄の街にあって、「大人の学びを止めない」以前に大人も学びに巻き込む仕掛けをどのように構築するか。
- ・「市高タイム」は、生徒にとっての主体的な学びの場であるとともに、大人にとっての主体的な学びの場ともなるべきという観点から設計する必要がある。
- ・「魅力ある高校づくり」といった時の魅力とは誰にとってのものかということ、考えるべきである。高校生本人であれば高校生活の充実であり、保護者であれば進学、就職がしっかりしていることである。市民であれば地域貢献である。学費の見直しを含めて、経営上の持続可能性を図りながら、魅力をあげるための投資をしっかりとやるべきである。
- ・何を学ぶかだけでなくどのような環境で学ぶかについて、9月入学が浮上している中、諸外国への学生流出等の問題に対しても取り組むべきことと思う。そのためには、小中学校指導要領改正のポイントがベースになっていかななくてはならない。

②人口動態・産業・周辺の高校の状況等【資料2】

- ・第2期北九州市まち・ひと・しごと創生総合戦略自体が、post COVID-19、

with COVID-19 といった視点でみたとき見直しが必要となっている。
STAY HOME や非接触のニーズに応える暮らし方や働き方を踏まえたし
ごとの創生などについて議論が必要である。

- ・市立高校再編について、「市内産業への人材供給」と「市立高校生への学
力保障及びその延長としての進路保障」のどちらに重きを置くかで検討の
方向性が変わる。
- ・「市内産業への人材供給」に比重があるのであれば、分析・判断するべき
は市内産業の人材の需給動向及び将来見通しといった、産業側の人材ニー
ズとなる。その点で今回の資料に加えて、服飾業界だけでない市内産業の
詳細分析を行っていく必要がある。
- ・「市立高校生への学力補償及びその延長としての進路保障」に比重がある
のであれば、検討の入口は、市立高校生に現在身に付いている資質・能力
や、卒業進路といった、個々人の能力形成と進路選択の実態になる。生徒
の進路について「市内産業への人材供給」に重きを置かないのであれば、
必ずしも「高校の学習内容＝就職先」を絶対としないので、「教科・専門
科目等を入口にした、今後の社会で生きていくための汎用的な能力形成を
いかに担保していくか」というあり方を検討していく必要がある。
- ・減少する人口の中で、北九州市の経済力を維持、向上させていくには、多
様な力を持った生徒を育成していく必要性がある。
- ・北九州市の中学卒業生の推移と市内の県立高校の定員総数、また市内の県
立高校の定員割れがある現状や、私立高校数が人口比に対して多いのでは
ないかとも思われ、数値的に生徒数の確保は厳しい現状はある。
- ・市内及び国内の衣類関係産業の状況をみると、戸畑高等専修学校は、学び
を生かした出口確保(就職先)が減少している現実が示されている。
- ・自然災害に強い利点や物流拠点となりうる地の利を生かし、北九州市を離
れず、この地で就職できるような人材資源の流出を防ぐ企業誘致を進める
ことができないだろうか。

③市立高校に関する方向性【資料3】

- ・市立であることから、中高一貫や高大接続などの縦の改革の可能性が高い
ことが最大の魅力である。市立大学の（代替）附属として教育実習校や研
究開発実験校としての機能を果たしたり、教育センターとは別の研修機関
としての役割を果たしたり、北九州市が高校を有することの意味を積極的
に打ち出す必要がある。
- ・授業時数を減らして課外活動として部活動や受験対策をしながら、授業時
間内で思い切って地域探求活動ができればすばらしい。
- ・既にスタディサプリを導入しているなど、先駆的な取組ができています
ので、コロナの第二波への対応などもしやすいと思うので、その意味でも安

定性の高い運営ができると思う。

- ・ 県立高校だと市や区と一緒に取組をしようとしてもどうしても壁があるが、市町村立であればその壁がないので、学びの土壌づくりという点でも対応がしやすい。
- ・ 上記のとおり、北九州市が有している意義はクリアできるし、意義ある取組を行うために学びの土壌づくりをやっていけば、問題ない。基本的に今やっていることを発展させればよいので、現在の資源でも対応可能である。
- ・ コロナ対応をしていくことが高校改革につながると考えている。まず、休校している中などでもしっかり学習する生徒を育成するには、自走性の高い生徒を育成していくことが大事。そのために、生徒に興味関心を持たせることが必要なので、探求的な取組は重要になってくる。
- ・ さらに、コロナ対応の際は、教員のサポートが大事で地域の手も借りないといけないが、その関係が探求的な取組にもつながる。このようにコロナ対応が地域人材の育成に結果的につながる。
- ・ 北九州市が引き続き有していくことを十分に説明できる新たな取組については、市の目指す方向性や戦略との連携を強め、探究的な学びを充実させていく方針には賛成である。
- ・ 意義ある取組を行うために実施すべき内容としてどのようなことがあるかについては、SDGs や、その他まち・ひと・しごと創生総合戦略にある産業振興の方向性を、抽象的な「お題」として与えるだけでは不十分と考える。生徒が直接的に学ぶ舞台・相手となる企業や地域組織、市役所の担当課や関係団体を具体化し、その理解と協力を得ていくプロセスが何より重要と考える。そのためにも、こうした市の資源の教育資源化をコーディネートする役割の確立・強化について検討する必要があると考える。
- ・ 「市高タイム」という取組もチャレンジなものだと思う。生徒が、裁量のある中で自己決定していく経験を積むことは非常に重要である。一方で、①本人に丸投げの「個別最適化」、や、②実質的に進路希望によって時間の使い方がパターン化・固定化される「トラッキング」化、に陥らないための高度な舵取りの方策と教員の伴走スキルを担保していく方法が求められる。
- ・ 実施すべき内容について現在の学校や北九州市の資源で対応が可能かについては、一般論として、組織内の人材の流動性、多様性を高めること、および個人内での多様性（への感度）を高めることが、探究的に学ぶ環境の素地として重要であると考えます。学校と他の組織の連携を考えると、その人材交流についても検討することはできるのか。
- ・ 探究的な学びに関して、ある高校の事例では、「探究リーダー」という授業補助の役割を生徒に与え、グループワーク等、進行上必要な役割を担ってもらっている。立候補した生徒には、事前の授業の進め方を

検討する会議にも出席してもらい、授業の狙い等を理解してもらおう。市立高校も、力のある生徒が集まる高校と思うので、探究の進行をともに担うという前提で考えてはどうか。

- ・市との結びつきを強めて「地域探求」という形で実行していくという点は、市立高校という使命や、課題解決型人材の育成という観点から必要なことである。これらの活動と教科学習を結び付け、基礎学力を固めることが重要と思われる。このようなことを実施するためには指導者の育成も重要なので、外部組織との連携を図りながら取り組む必要があると思う。
- ・北九州市が推している産業施策に関わる取組も重要である。しかし、いずれもハイテク産業なので高卒で対応できる部分は限られるのではないか。そのため、評価のインデックスとして、本市の重点産業に関わる工学系および商業・サービス系の大学進学率をとり、将来的な人材育成に寄与するスタンスを明確にしてはどうか。
- ・総合的な探求の時間で、地域探求やSDGs等を学ぶことで、色々なことに興味を持ってもらって、何かをがんばれる起爆剤のようになればよい。第1回会議で出た「夢中は努力に勝る」という方向に持っていくのが理想である。
- ・学校の改革は教員がやる気にならなければ意味がない。ただこの意識を変えるのは簡単でないため、人事的にも考えていかなければいけない。
- ・魅力づくりで部活をどう考えるかは重要である。
- ・学則が厳しいかどうかも学校選択の一要素となっているところはある。ただ厳しいだけの指導ではなく、声掛けなどの指導の仕方を変えていくことも必要である。
- ・中高一貫は、子ども確保や色々な面の質の向上等が見込めるため有効である。
- ・建物などのハード面は古く、校内も暗い状況であるが、大規模改修では意味がないのではないか。
- ・改革は、建物の建替も含めたて検討するべきである。建替の場合、現地でできるのか、他に移るのか等の検討も必要である。

(4) 戸畑高等専修学校に関する方向性【資料4】

- ・そもそも高等専修学校という制度自体の未来像をどう想像できるかだと思ふ。また和裁洋裁自体の今後についてもそのニーズをどう捉えるかだと思ふ。中学を卒業して入学する「後期中等教育」という位置づけでなく、生涯学習の体系の中で位置づけることができれば、STAY HOME時代にはニーズや魅力はかなりあるのではないか。
- ・北九州市として選択と集中をする必要があり、この学校に代替的な役割を果たす学校が周辺にあるのであれば、市立高校を選ぶという選択肢になる

かと思う。

- SDGs という観点から見れば、「1.貧困をなくそう」「4.質の高い教育をみんなに」「5.ジェンダー平等を実現しよう」「10.人や国の不平等をなくそう」など、多くの目標に関連する教育機関だと思うので、市としても SDGs 推進の象徴として大事にされることがよいのではと思う。
- 実態として、卒業生の進路がどうなっているのか。また、中退の状況がどうなっているのか、という点を考慮して、専修学校での学習内容を検討する必要がある。
- 「生徒の進路保障」という観点に立つのであれば、服飾業界への人材供給はなくとも、「服飾を通じた汎用的な資質・能力の形成」がある程度達せられており（本田由紀東大教授の「柔軟な専門性」の議論）、卒業生の生活の安定がみられるのであれば、専修学校の意義は大きいと思われる。
- 「服飾業界に入るための専門性の習得」と、「服飾の学習を通じた主体的、探究的な学びによる汎用的な資質・能力の形成→進路保障」は似て非なるものであり、現状の設備や教える人材の前提条件を所与とするならば、前者から後者への転換を図っていく方向性が考えられる。
- 北九州市の衣服関係製造業の事業所数と従業者数の推移については減少傾向にあるとのことなので、教育機関として将来的にはこの分野に依存する限りは、縮小せざるを得ないのではないかと思う。ただし、進学、就職は順調で地元での認知もあるようなので、直ちに分野を転換する必要はないと思う。設備、教員の点でもそれは困難であろうと思う。
- 成長分野である医療、福祉、介護、社会保険などとの接点を考え、内容を高度化していく必要がある。たとえば医療向け衣服の開発や介護向け衣服の開発、デザインなど専門性を高めて就職に結びつけるなど。そのような努力の上でも、生徒数の今後の動向によっては、他校との統合も視野に入れるべきではないか。
- 中学校まで自己の学習目標や将来への展望が抱けず、自己肯定感や自尊感情を醸成できずに入学してくる場合が多い。（もちろん被服に興味関心を持ち第一希望として本校を選択し入学してくる生徒もいる。）
- 専門分野（洋裁）を学ぶという限られた教育課程の中で、少人数での学び、教員の細やかな指導等で、技術を身に付け、当校で学ぶことにより自己肯定感や自尊感情を高めることができ社会人となった生徒も多い。資料1の「学びの土壌」に記されている意味とはかなり違いがあり、一般の高校と比することはできないが、当校なりの学びの土壌が形成されている。
- 生徒数の減少や退学者数の問題、また進路確保（当校での学びを生かした出口確保）については、市内は特に、全国的にも難しい現状がある。（市内に大手縫製工場がない、縫製工場の多くが海外へ移転している、

アパレル業界の衰退等、また新型コロナウイルスの件で今後はもっと厳しくなるのではと懸念される。)

- ・クラス数削減に伴い洋裁を教える教員数が削減され、指導の充実が難しくなっていくことが懸念される。生徒定員数が削減されても教員の確保をお願いしたい。それは、中学校3年の家庭科の単位数は0.5で、2週に1回しか授業が行われない計算になり、生徒はほとんど洋裁技術を身に付けず入学してきているのが現状である。その生徒に対して1から洋裁の知識や技術を身に付けさせるべく指導を行っているのである。生徒のためにも指導の充実が必要となってくる。
- ・今後の教員の人員確保が次第に厳しくなっていること。家庭科の教員数の減少の問題、その中でも大学では食物や栄養学を学び家庭科の教員となった教員が多くなってきており、洋裁を専門に学んできた教員が少なくなっている。当校で洋裁を担当している教員(講師も含む)も次第に高齢化してきている現状がある。
- ・第1回会議での意見の中に北九州市の経済、費用対効果の話も必要であることや、事務局から財政的な面も考えなくてはとのことであった。今回の資料から厳しい現状を痛感した。

(5) その他

- ・外部者が立ち入ることが難しい情勢が続いているが、2校を訪問できる機会をもてれば幸いである。
- ・次回はテレビ会議で開催出来たらよい。